
天花

神無森 皓

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天花

【Nコード】

N8256R

【作者名】

神無森 皓

【あらすじ】

親友の入院先に向かう大学生、一海の前に降ってきたのは雪のような白い花びら。「雪が、見たかったんだ」――変わっていく友人と、壊れそうな家族の関係。苦しみの果てに一海が見つけた答えとは――？ これも数年前に書いたものですが、今載せておきたくて投稿しました。ファンタジー要素ゼロの現代物です。

白い手のひらから、こぼれ落ちんばかりの大量の白い花びら。

小さな山を崩さぬよう、慎重に窓の外へと差し出された両手の上から一枚、また一枚と風に飛ばされていくそれは、季節外れの雪を思わせた。

坂道の途中で、一海^{かずみ}は自転車を降りた。

勾配のきつい坂道だが、自転車で登れないことはない。すぐ近くに商店街があるため夕方のこの時刻、道は買い物客や下校途中の中高生で混雑するのだ。そんな中を自転車に乗ったまま進めば、接触事故を起こすのは確実だ。

どうせもう、目的地まではたいした距離もない。

坂を登り切って自転車のサドルにまたがり、下り坂の途中で脇道に入る。ゆるい下り道を一分も行かないうちに、白い建物の壁が見えてくる。

正門側にまわって、指定の場所に自転車を停める。

煉瓦で舗装された歩道には、何本も並んだイチョウの木が濃い影を落としていた。その縞模様の中へ一海は足を踏み出す。

半袖のパーカーに包まれた身体は、足下に伸びる影と変わらない

ほど細く縦に長い。半端に脱色した髪は硬く、あちこち勝手に跳ねている。

鼻先に落ちてきた髪を指先で払い、同時に一海は気がついた。薄曇りの空を、ひらりと横切ったなにか。

白いかけらは空中で回転しながら、彼の足下へと降りてくる。一瞬雪かと思いかけたが、雪にしては大きすぎた。第一今は六月下旬である。

赤茶けた煉瓦の上で動きを止めたものは、白い花びらだった。花の種類には詳しくないが、縁のぎざついたこの花びらには見覚えがあつた。おそらくカーネーションだろう。なぜ見覚えがあるのかというと、つい先週花屋で購入したばかりだからである。続いて、視界を横切ったのは細長い小さな花びら。縦にすじの入った、張りのあるこの花びらはガーベラ。ふわりと優雅に宙を舞い降りてくるのはトルコキキョウか。

奇妙な予感を覚えながら、一海は視線を上げる。

建物の窓から突き出された、白い腕が目に入った。指をそろえて、天へと向けられた手のひらには山盛りの花びら。その中からひとひらがまた、風にさらわれて落ちてくる。

予想通りの光景に一海は脱力するような、憤然とするような複雑な思いだった。

窓の位置から、犯人の予想もついている。驚かせたことも含めて、一言文句をつけてやろうと足を速めたその時だった。

叩きつけるように、真正面から風が吹く。

思わず目を細めた直後、一海の目に映ったのは一面に舞う白い花びらだった。音もなく降りしきる花びらに、知らず目を奪われる。はたと我に返ったのは、花びらが全部落ちきってしまったそのあと。

呆然と見とれていた照れ隠しも加わって、一海は足取りも荒く歩き出す。ちらりと窓を見やるが、もう腕はのぞいてはいなかった。あの野郎、と心の中で呟き、一海は建物の入り口へと向かった。

「お前なあ」

部屋に入っの第一声に、祐貴は軽く吹き出した。

予想通りの一言だったらしい。くつくつと肩を震わせて笑っている友人を、一海は睨みつけた。

「せつかくの人の見舞いを、窓からバラして捨てるたあ何事だ？ お前がたまには花でも持ってこいって言うから、買ってきてやってたっていうのに……わざわざ白い花って注文をつけたのはこのためか？ そのためにナースセンターからの冷たい目に俺は耐えたのか？ 白一色の花束持って病院長るのは、けっこう度胸がいるんだぞ」

「悪い、悪い」

その台詞も、笑いながら言ったのではまったく説得力がない。ベッドの脇に置かれた背もたれのない椅子に、一海はどっかりと腰を下ろす。

「あんなことのために使ったのなら、もう二度とお前に花なんて買ってこないぞ。あれでもけっこう高かったんだからな」

「スーパーの特売だつて言つてなかった？」

「無駄なことに使う金は、一円だつて惜しいんだよ。それにあれだけの量だと一束や二束じゃきかないんだぞ」

「はいはい、悪かった……でも、綺麗だったろ？ 雪みたいで」

内心、そう思つて見とれた事實は伏せて、一海は眉を上げて言つた。

「大量の生ゴミの行方のほうが、俺には気になったよ」

「うわ、ロマンのかけらもない」

「ロマンもへつたくれもあるか。清掃の人の迷惑になるだろ」

「そう思ったから、紙とかじゃなくて自然に還りやすい花びらにしたのに。それでも一応考えてはいるんだぞ」

自然にやさしいエコマーク付き、とわけのわからないことを口走る祐貴。

深々とため息をついて、一海はその顔へと目をやった。

伸びつぱなしの髪は肩に届く長さだ。格別整っているわけではないが、人を引きつける愛嬌のある顔立ちをしている。特に、表情のくるくるとよく動くその瞳。

深い茶色の瞳は、浜辺の小石のように艶を帯びて光っている。以

前よりも濃い色をしているようにも思うが、長期の入院で色が白くなっているためだろう。真夏の日差しが作る影のように、黒い髪と瞳が鮮やかに際立つ。

「それに、花はもう傷みかけていたからさ。どうせ捨てるんだったらって思っ、窓からまいてみたんだ」

「そこで窓からまくって発想になるあたり、なにかが間違ってるんじゃないのか？ 新築祝いの餅まきじゃあるまいし……」
うわ懐かしいなあ、と祐貴が笑う。

一海の記憶にも、何度か餅巻きに参加した記憶は残っていた。小学生くらいの時のことだろう。野球帽や風呂敷で、飛んでくる餅や菓子類を受けとめて山ほど持って帰った覚えがある。

最近はそのような行事をやる家も少なくなり、二十歳を過ぎた男二人がはいしゃいで餅まきに参加するわけにもいかず、なによりも祐貴は自由に病院の外を歩くこともできないようになってしまった。

黙ってしまった一海の顔から、その内心を察して祐貴は表情をかげらせる。

それに気づき、なにこともなかったように一海は話題を戻した。

「で、なんだって花咲じじいの真似事なんかしてたんだ？ まさか清掃員に喧嘩売るのが目的じゃないだろ？」

「花咲じじいって……あれ、まくのは花じゃなくて灰じゃなかった？」

「どっちにしても行き着く果てはゴミだろ。はた迷惑な話だ」

真顔で断じる一海に、ちらりと苦笑めいた表情を向けてから、祐貴は窓の外へと視線をやった。

そぎ落とされたような頬の線が、かすかに動いて言葉を放った。

「……雪が、ね。見たかったんだ」

「雪？」

「うん」

ふりむいて、祐貴は口元に笑みを浮かべる。

どこか諦念の漂う笑みが、一海の心を揺らした。自分でも驚くほどの動揺を隠すため、あえてそっけない口調を作って彼は答えた。

「そんなもん、冬になったらいくらでも見られるだろ」

「……うん」

祐貴の笑みが、わずかばかり深くなった。

心の底からのものとわかる笑みに、一海も口元をゆるませる。

そのあとはしばらく、たわいもない雑談をして過ごした。一海が大学での近況を話し、祐貴は周囲の人々や最近読んだ本についての話をする。共通の話題は少なかったが、気がつくと一時間以上が過ぎていた。

バイトの時間が近づいていたため、一海は断りを入れて席を立つ。

「あ、今度また本持ってきて欲しいな。前に読んだことがあるやつでもいいから」

「いいけど……また熱中して読むなよ。スタンドの明かりで一晩中読みふけてて、婦長さんに怒られたのついこの間だろ」

「だから、前に読んだことがあるのでもいいって言っただろ。予防線だよ予防線」

「つまり、新作だと途中で止める自信がないってことか」
いささか不本意そうな表情になって、祐貴は上目遣いに一海を見やる。

「失敬な。この間で懲りたよ。二度とやりません」

「そっか、じゃ図書館でなにか新しいやつを借りてきてやる」

「あ、悪魔の誘惑を……」

半分本気の口調で呟く祐貴に、一海は軽く手を振って入り口に向かう。

引き戸に手をかけた時、その背中に祐貴が声を投げた。

「^{ひろと}博人、元気？」

一瞬手を止めてから、一海はふりかえる。

その顔にも声にも、感情はのぞいてはいなかった。

「じゃないのか？　ここ最近、顔見てないけど」

「そっか」

わずかに沈んだ声で言つて、祐貴は笑顔を作る。

「暇なら一度くらい見舞いに来いって言っておいてよ。本でもゲームでも差し入れ大歓迎だつて」

「わかった」

笑顔で答えられたのかどうか、自信はなかった。

硬い表情を隠すように、一海は前を向いて引き戸を開ける。祐貴の表情は見えなかったが、こちらを向いているのだけはなんとなくわかった。

ふりむくことはせずに、一海は病室を出て後ろ手に戸を閉める。
レールの上をドアが滑る鈍い音が、いやにはつきりと耳の中に残
った。

ながらいゆたか
長良井祐貴が入院して、もう二年がたつ。

最初は単なる体調不良とされていたが、病院で検査を受けた結果肝機能に異常があることが判明した。成長とともに肝臓の働きが低下し、体育の授業中に突然倒れて救急車で運ばれることとなったのである。

投薬によつて一時は落ち着いたが、祐貴の身体は日常の生活にも耐えうるものではなくなっていた。

くり返される入退院。次第に入院している日数は長くなり、やがて学校で彼の姿を見ることはなくなった。かろうじて卒業できたのは、病室まで補習に出向ってくれた教師陣の努力と、毎日のようにノート持参で見舞いにきた一海を含むクラスメートの存在あつてのことだろう。

しかし、いつしかそうやって見舞いに来る者の数も少なくなっていた。

受験を控えた生徒たちに、見舞いを控えるよう通達したのは学校側だが、それを渡りに船と感じた生徒も多かったに違いない。

最後まで、病室に通い続けたのは一海ただ一人だった。
一海も受験に不安を感じていないわけではなかったが、それ以上

に一人、二人と欠けていく病室にただ一人残される祐貴の気持ちを考えずにはいられなかった。試験直前の一月ほどはさすがにその余裕がなかったが、無事合格をはたした時にはこれで安心して祐貴のところへ行けるなど、安堵したことを覚えている。

祐貴は一海にとって、別格ともいえる友人だった。

倒れる前は元気すぎるくらいに健康な子供で、近所の子供のリーダーとなって皆を引っ張り回していたものだ。長じてもそれは変わらず、にぎやかな彼のまわりにはいつも人が集まっていた。

そんな彼の相棒であることを、一海は長い間ひそかに誇らしく思っていた。

相棒というのは、常に悪戯の相談役だった一海を祐貴が呼んだ言葉である。『俺の相棒だから』というその一言が、当時まだ小学生だった一海の胸に強く焼きついて、その後の行動方針を決定づけた。それくらい、嬉しかったのだ。

だから、受験勉強のかたわら毎日の授業のノートを持って、病室へと通うこともさほど苦には感じなかった。自分は彼の相棒だから――友人たちの足が病室から遠のいていっても、それは変わらなかった。

子供っぽい独占欲だと承知しつつ、祐貴を独り占めできることに満足さえ覚えたものである。

それよりもつらかったのは、変わっていく祐貴の姿を見ることができなかった。

健康そうに日焼けしていた頬はすっかり白くなり、腕も背中も一回り以上細くなった。一海も身長割には幅がないが、今の祐貴は

彼よりもまだ細い。その姿からは、かつてのやんちゃ小僧は想像もできなかった。

口数もずいぶん少なくなった。入院前は、テレビばかりでまるで読まなかった本を読むようになり、くだらない冗談や軽口で大笑いすることもなくなった。

なにより、帰る間際の一海に向けるようになった、すがりつくようなその目。

重くまとわりつくようなその視線を、時に負担に感じることもあった。祐貴の入院費を得るために必死で働いている両親は、滅多に病室に顔を出すことができない。高校を卒業したかつてのクラスメートが訪れることは、さらにまれだった。

それを考えると、無理のないことなのだとわかる。それでも、変わってしまった祐貴に落胆とも腹立たしさともつかぬものを感じ、そのことに自己嫌悪を覚えることも少なくはなかった。

現在、祐貴のもとへ通う一海を支えているのは、自分以外にもう誰もいないのだという責任感と、もう一つ。

一海にとっても、祐貴の側だけが安心してくつろげる場所だという事実のためだった。

学校にもバイト先にも、会えば会話をする程度の友人はいるがお互いに深く突っ込んだ話はしない。格別やりたいこともなく、家にいたところで愉快でもない現実が待っているだけだった。

結局、祐貴を利用しているだけのことなのかもしれない。

そう思うと、ますます嫌悪感がつのった。自分が立派な人間だなどと思ったことはないが、あまりの情けなさにため息が出る。

「高沢さん？」

そこに突然声をかけられて、一海は危うく声をあげるところだった。

思いにとらわれて、背後に立った人影にはまったく気づきもなかった。跳ねる心臓をなだめながらふりむいた彼の目に、居酒屋のお仕着せを着た小柄な女の子の姿が映った。

「どうかしたんですか？　なんかすごく深刻そうな顔してたけど」

「いや」

バイト仲間に向かって、一海はかろうじて笑みに見える表情を作って言った。

「なんでもない」

「具合とか悪いんじゃないんですか？　体調悪い時は早めに言ったほうがいいですよ？」

「ありがとう。でも平気だから……ちょっとサボってたんだ。ビールのケース重いから」

「あーあ、だめですよ。忙しいんだからこの時間。チーフに言いつけちゃいますよ」

「それは勘弁して。これ以上こき使われたら本当に過労で倒れちゃうよ」

わざと情けなさそうに言うと、相手は肩を揺らして笑った。和風のお仕着せに合わせて一本に束ねた髪が、首の後ろで軽く揺れる。女の子とは言っても、十代後半だ。あどけない表情と濃いメイクが、どこかちぐはぐな印象だった。

店内に戻っていく彼女を見送って、一海は店の裏手に積み上げられたビールのケースを持ち上げた。

一海が家に戻るのは、いつも深夜だった。

居間の明かりはついていないが、そこに人に姿はない。白々と灯る光が、逆に誰もいない部屋のむなしさを強調しているようだった。

母親はすでに休んでいるのだろうし、弟はたとえ起きていても部屋からは出てこない。自室に鍵をかけ、家族の目を盗むようにして生活しているのだ。部屋からはかすかにゲームの音楽が聞こえたが、軽くノックをして声をかけても応答はなかった。

疲れたように、一海はソファに座り込む。

玄関に並んでいた靴は二足。家から出ない弟の靴も、母親は決して靴箱にしまいこもうとはしなかった。薄くほこりをかぶったスニーカーと、くたびれた女物の革靴。

その横に、父親の靴はなかった。

おそらくまた、愛人のところへでも行っているのだろう。

一海は一度立ち上がり、冷蔵庫から取ってきたビールのプルトップをあける。床にでも落としたのか、勢いよく噴き出してきた白い泡に慌てて彼は慌てて口をつけた。

半分ほどを一気に呑みほして、一海は缶をテーブルに置いた。

小さな音の一つ一つが、必要以上に大きく聞こえる。離れてしまった家族の間の距離を思わせる、がらんとした部屋。

父は外に女を作ってほとんど家に戻らず、母はその父の機嫌を取ることに必死になっている。高校を中退した弟は、仕事もせぬまま部屋にこもりきりで何ヶ月も家族とさえ顔を合わせていない。

どこで、歯車が狂ったのだろう。

この部屋で、確かに家族として幸せに過ごした時間もあつたはずなのに。それはただの幻だったのか。

自分は幼すぎて、家族の本当の顔に気づくこともできなかったのか。

少しでも家族の関係を修復しようとして、必死にあがいた時期もあつた。しかし努力は無駄に終わった。

家族の間に生じた亀裂は、すでに手出しのしようもないほどに育っていた。

ここにあるのは家ではなく、一人のための部屋の集まりだ。一人きりのための部屋と、一人きりのためのドア。

閉ざされたドアの間で、立ちすくんでいるのが自分だった。

どうしようもないとわかっていても、この場所から動くことができない。ドアが開き、誰かが顔を出してくれるのをただ待っている

のだ。

まるで主人を待つ飼い犬のようだ、と唇に自嘲が浮かぶ。

大学進学を機に、家を出ることも考えたが実行はしなかった。

学校が家から通うことができる距離だったのも理由の一つだが、それ以上にこの状態の家を離れることのほうが恐ろしかった。目を離したわずかな隙に、この家庭が取り返しのかめほどに壊れてしまふような気がした。

本当は、とづくにもう手遅れなのだろうが――

（学校を卒業したら……）

家を出よう、と一海は決心していた。

もう、この家にとらわれるのはごめんだと思った。ありもしない家族の絆にすがって、現実との間で苦しむのはいやだった。

壊れかけているのであれば、いつそ完全に壊れてしまえばいい。

ガラスに入ったひびを消すことはできないし、散りかけた花をつぼみに戻すこともできない。時間は決して戻らない。

顔を伏せた一海の脳裏に、昼間見た光景がよみがえる。

曇り空に舞う、一面の白い花びら。

そんなふうに碎けて、消え去ってしまえばいい。そうしたら、思い出の中によみがえる家族の記憶だけは綺麗なままでいられるかもしれない。

ありえないと知りつつ、一海は思っただけで暗く笑う。

どんな家庭であろうと、それがただ一つの自分にとっての家庭だ。失ったことが綺麗な思い出に変わる日など来るはずがなかった。

低い自分の笑い声を聞きながら、爪の痕が残るほどきつく一海は両の拳を握りしめた。

「……え？」

その、二日後。

いつものように訪れた病室に、祐貴の姿はなかった。
本の入った紙袋を片手に、一海は目をしばたかせる。ベッドの
まわりの私物も綺麗に片づけられている。
顔見知りの看護師が通りかかるのをつかまえて、一海は事情を聞
いた。

「退院したんですか、祐貴？」

「え？ あ……長良井くんね、ちよつと病室移ったの」
まだ若い看護師の表情が、わずかに曇ったのを一海は見逃さな
かった。

苦いものが、胸に広がる。

「もしかして、容態悪くなった……とか？」

「少し、ね」

答えて、彼女は表情をやわらげる。

「大丈夫よ。ちよつと体調崩しちゃっただけだから」

「また、徹夜でもしてたんですか？」

思わずそう言つと、看護師は小さく笑って首を横に振った。
その目が、自分の手元へと向けられているような気がして、一海

は手に提げた袋をさりげなく身体の後ろへまわした。

看護師とさらに二言三言かわすと、一海は礼を言って病院の入り口に向かった。

まだ、面会のできる状態ではないらしい。

看護師は大丈夫だと言ったが、一海は胸の奥に鉛の塊でも呑みこんだような重苦しさを感じていた。

頭に浮かぶのは、窓の外を見ていた祐貴の姿。

その頬の線も、背中もいつの間にあんなに細くなってしまったのだろう。入院してから確かに祐貴は痩せたが、春先からの痩せ方は尋常ではなかったような気もする。

ただ、自分がそれを認めようとしなかったただけだ。

――雪が、見たかったんだ。

そう呟いた祐貴の、あきらめたような瞳の光。

散りゆく白い花を、風に差し出した手首の細さ。花にも負けないほど白かった手首に、鮮やかに浮かび上がった静脈。

それらの断片的な光景が、一海の頭の中を飛び回る。

一海は首を振って、それらの光景を頭の中から追い払った。大丈夫だ、となんの根拠もなく自分に言い聞かせて、足を速める。

まさか、大事になどなるはずがない。

今までも平気だったのだから、今回だって平気に違いない。

祐貴が自分の人生から、消えてしまうことなんてあり得ない。そんなことがあっていいはずがない――

念じながら、一海は機械的に足を動かす。

気づいた時には、息を切らすほどの速さで彼は病院の外へと歩み出ていた。

それから一週間もたたないうちに、不吉な想像は現実となった。

真夜中の電話に起こされ、受話器を取った時にはもうそれがなにを知らせる電話なのかわかっていた。

受話器を握りしめて、ただ相づちを打つ。

弱った声が、ありがとうねと最後に告げて電話は切られた。ツ―

その手が、自分のものではないように思われた。

（祐貴ね、さつき息を引き取ったの）

受話器に貼りついたような指を、無理やりはがす。

（苦しまなかったのよ、全然……意識は戻らなかったから）

自分と空気の中に、分厚い膜ができているような気がした。息を吸っても、空気が入り込んでこない。皮膚の感覚も、耳に入る音もすべて遠い。

電話から手を離すと、一海はその場に座り込んだ。

自分の耳にした言葉が、まだ信じられなかった。なにかの冗談ではないかと、心の奥でささやく声がある。

そんな悪趣味な冗談があるはずがないと、頭ではわかっているのに。

うつむいて、一海は顔を手で覆った。

信じられなかった。そんなことが、あつていいはずがないと思った。まだどんな覚悟もできてはいなかった。

細く長く、一海は息を吐き出す。

頭の芯が、麻痺しているかのようにだった。胸が引きちぎられそうに苦しかったが、涙は一滴も出てきはしなかった。

しんと静まった家の中に、一海は身を滑り込ませた。
音を立てないようにドアを閉めて、居間に入る。明かりをつける
と、暗さに慣れた目に光が刺さるように感じた。

荷物をソファの上に置いて、台所へと移動する。
朝からまともにものを食べていない。空腹感はまるでなかったが、
一海は惰性のように棚のカップラーメンへ手を伸ばす。

祐貴の葬式に出たあと、家に戻って服だけ着替えてバイトに向か
った。

親ならともかく、友人が一人死んだだけで勝手に休むわけにはい
かない。誰かに出番を代わってもらうことも考えたが、急なことで
手配はつかなかった。

それに、たとえ代わりが見つかったとしても休む気にはなれなかっただ
ろう。

忙しく身体を動かしていれば、その間だけでも頭を占めている思
いから遠ざかっていられる。昨日と同じ日常が続いていると信じる
ことができる。

それでも注意力は落ちていたらしく、普段なら絶対にやらないよ

うな失敗を何度もくり返した。

熱湯を注いだ容器を持って、一海は居間に戻る。

葬式にはかつてのクラスメートたちの顔もあった。思いがけない数だった。ほとんどの者が涙を浮かべ、心から祐貴の死を悲しんでいるのがわかったが、その姿を一海はどこか冷めた思いで眺めていた。

彼らはどれだけ祐貴のことを知っているというのだろう。祐貴の苦しみも、彼の感じていた寂しさも誰にも理解することはできない——自分も含めて。

病院に通い続けていたのは、祐貴ではなく自分のためだ。だから、彼の病状が悪化していることにも気づきはしなかった。見舞いに行っているということだけで満足し、来なくなった他のクラスメートたちに対して意味のない優越感を覚えていた。

そんな自分自身が、ひどく厭わしかった。

気がつくと、三分の時間はとくに過ぎていた。しかし一海は、カップラーメンに手をつける気にはならず、ぼんやりと宙に視線をさまよわせていた。

その背に、かすかな物音が当たった。

一海は身動きしなかった。母親でも起きてきたのだろうと思い、その音を意識の中から閉め出す。その姿を見れば、会話を拒否していることはわかるだろう。今は、母親と話をしようという気にはなれなかった。

だが、耳に届いた声は予想もしない相手のものだった。

「兄貴」

低くかすれたその声。

自分の耳が信じられず、一瞬動きを止めてから一海はふり向く。

「……博人？」

直接その顔を見るのは、数ヶ月ぶりのことだろうか。

記憶の中にあるよりも、少し太った博人の顔を愕然と一海は見返す。驚きのあまり声を失った彼に、博人は聞き取りにくい声でぼそと尋ねた。

「祐貴……死んだの？」

無造作な言葉に、一海の胸の中が焼け付くように熱くなる。

だが、一海は怒りをこらえて黙ってうなずいた。弟に怒りをぶつけたところで、なにが変わるわけでもない。

「……そう」

博人の答えは、それだけだった。

気のない声に、一海は今度こそかっとな声を荒げかける。

しかし言葉は放たれなかった。博人の顔が目に入った瞬間、その目に涙が溜まっていることに一海は気づいたのだ。

すつと片方の目から、涙があふれ落ちる。

その様子を、一海はただ呆然と見つめた。全身を満たしていた怒りが一瞬にして消え、かわりにこみ上げてきたのは悲しさだった。胸にのしかかっていた悲しみの大きさに、その時はじめて一海は気づいた。

そうと自覚する間もなく、視界が歪む。

「そうなんだ」

博人の声を遠く聞いたと思った瞬間には、もう涙が頬を伝っていた。

隠しようもなく、こらえようもなく、ただ流れる涙を一海は拳で拭う。拭っても拭っても涙は止まらなかった。しまいには涙を止めようとする努力をあきらめ、一海は手で顔を覆った。

殺しきれない嗚咽が、指の間から洩れる。

——そうだった。

いつも自分について歩いてた幼い弟を、自分以上に可愛がっていたのが祐貴だった。兄弟のいない彼にとっては、実の弟のような存在だったのかもしれない。博人も祐貴にはよく懐いていた。自分の弟なのに、と複雑な気分になったことも数え切れない。

高校を中退したあと、部屋にこもるようになった博人のことを一番心配していたのも祐貴だった。

そこにあつたものは、見えなくとも確かな絆だ。

「……祐貴は」

かすれた声で言つて、一海は顔を上げる。

涙に濡れた博人の目が、まっすぐに自分を見返していた。心の奥まで届くような眼差しだった。

同じように、自分の言葉も弟に届くことを信じて一海は口を開いた。

「お前はどっしってるって、よく聞いてきた」

博人は答えなかった。ただ、結ばれた唇がかすかに震えただけだった。

「元気にいるか、たまには見舞いに来いつて……言つてた」

「……そう」

「ああ。俺よりもずっと、お前のことを心配してた。薄情な兄だよな」

言葉の端が、涙で歪む。

博人は黙ったままだったが、目をそらしもしなかった。しきりに

まばたきをしながら、彼はスウェットの袖で鼻下を拭う。

初めて、弟の顔をまともに見たような気分だった。

今向き合っているのは、顔だけではないとわかった。自分の目の前にあるのは、ずっと目をそらし続けていた弟の本当の心だ。

この時間をくれたのは、祐貴だった。

彼の声が、どこからか聞こえてくるような気がした。

もう逃げるのは終わりにするべきだと——自分のためだけではなく、自分以外の誰かのためにある命なのだから、と。

博人の心にも、そのメッセージは届いたのだろうか。

ぽつぽつと、一海は祐貴のことを語った。一緒に遊び回っていた子供の頃の思い出や、入院してからの出来事。病室でかわしたなんでもない会話も、記憶に鮮やかに焼きついた空に舞う白い花のこと
も。

言葉少なに博人は相づちを打ち、少しずつ語り始めた。

彼の話は、古い記憶が中心だった。

夜が明けるまで、二人はひそめた声で話し続けた。もう決して増

えることのない祐貴の思い出を、互いの記憶に焼き付けておこうとするかのように。

静かな、それは静かな葬礼だった。

瞬く間に、いくつかの季節が過ぎた。

夏の暑さがやわらいだかと思うと、あつという間に木々は色を変え冬の準備を始める。葉のない木立が目立ち始めるようになると、もう冬は目と鼻の先に迫っていた。

季節が変わっても、一海の生活にさしたる変化はなかった。相変わらず、学校とバイト先とを行ったりきたりする毎日だ。家にはほとんど寝に戻るだけで、家族と言葉をかわすことも少ない。

しかし、変化したこともあった。

坂の向こうの病院が行き先から消え、かわりに祐貴の家とその墓が行き先に加わった。月に一度か二度、訪れては線香を上げて手を合わせる。一人息子を亡くした祐貴の母親の話相手をすることもあった。

家でも、わずかではあったが博人と会話をするようになった。相変わらず、ほとんど部屋に閉じこもったままの弟だったが、家族を必要以上に避けることはなくなった。一度は連れだって映画に

行ったこともあった。彼のストレスの原因は他人ではなく、家族にあることもわかった。

同じストレスを感じていた一海には、弟の気持ちがよくわかる。彼が間に入ること、博人が感じているストレスもいくぶん減ってきているようだった。

両親とも一度話し合ったが、互いに相手の言い分にはまったく耳を貸そうとはしない。一海に対しても、その時だけは口をそろえて子供がよい心配をしなくていいと彼らは言い放った。

それなら、大学を出たあとできちんとした決着をつけさせようと思った。親の義務だと思って、大学を出るまでは面倒をみてもらうことにしよう、と。

それまでの間、少しずつではあっても家族間で話し合いができる環境を作っていこうと決めた。

できることは少なくとも、時間をかければ変わっていく可能性がある。

自分たちにはその時間がある。生きている限り、どれだけ望みが薄かろうとまったくのゼロではない。

少しずつ、できることをやっていくつもりだった。

——なあ、そうだな。

はらりと、頭上に白いものが舞う。

墓参の帰りに、一海が見上げた空には漂う雪の姿があった。冷え込んだ晩秋の夕暮れ、一面に舞う今年最初の雪だった。

灰色の空を背景に、羽のようにかるやかに降ってくる。

天から差す薄日が、白いかけらを鮮やかに縁取る。

音もなく降りしきる雪は、まるでなにかの祝福のように美しかった。その姿が、かつて目にした白い花びらと重なって、一海は目をしばたかせた。

この花びらをまいているのは、一体誰の手なのだろうか。

心に浮かんだ感傷的な想像を、笑ってふり払って一海は歩き出した。この雪が積もれば自転車は使えない。早めにバイト先に向かう必要があった。

目にはじんだ涙を、雪のまぶしさのせいにして一海は足を速めた。

4（後書き）

過去の遺物を整理していたら出てきたものです。

今公開するのが妥当なのかわかりませんが、ちょっと気持ちの整理をつけたかったのであえて公開しました。

鎮魂の白い花が、すべての人の心の中に降りますように。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8256r/>

天花

2011年3月23日20時18分発行